

マラーの『嘆きの歌』と日本の民話

渡辺美奈子

(文学博士・ドイツ文学 横浜薬科大学講師) Minako Watanabe

『嘆きの歌』は、マラーが自ら「作品1」と呼んだことから、作曲家として自信を持つことができた最初の作品と言える。フローロスは、このカンタータが「萌芽の形でマラー全体を含んでいると言われようとも、誇張とみなされるべきではないだろう」と論じ、作品に含まれるマラーの「音楽言語を特徴付けるいくつかのもの」として、旋法性すなわち教会旋法に基づく和声や旋律構成を用いる傾向、調性の曖昧さ、大胆な不協和音の扱いを列挙した。Constantin Floros: Gustav Mahler, S.16.

こうした音楽言語的特徴だけではなく、『嘆きの歌』には、とりわけ初期の作品で見逃すことのできない民衆的要素が色濃く現れている。ワルターによれば、マラーの主題設定の重要部分は民謡に由来し、作品自体民謡であり、『嘆きの歌』のテキストも、「民衆的詩情の思考や感情の領域から出たものである」。歌う骨についてのグリム童話によって「詩的基盤」が形作られ、それにより「音楽は靈感を与えられ、徹頭徹尾独創的で、劇的感情と精神的人間性に満ちている」という。Bruno Walter: Gustav Mahler, Neuausgabe, S. 74ff.

マラー自身がテキストを執筆した『嘆きの歌』は、弟が死して嘆き訴え、兄の殺害が暴かれるという点において、「創世記」4章ならびにワルターが示した『グリム童話』の「歌う骨」と共通する。そもそも『嘆きの歌』*Das klagende Lied*の *klagen* には、「嘆く」の他に「訴える」の意があり、このテキストでは両方の意が兼ねられているのである。この「弟殺し」と「死者の訴え」は、さまざまな地域の民話や書物にみられ、そこに宗教や地域文化等が重ね合わされている。

「創世記」カインとアベルにおいては、信仰によって正しい者と神から認められた弟アベル（「ヘブライ人への手紙」11章4節）が血を流すことから、私見ではイエスの受難との関連が重要となる。グリムの「歌う骨」では、殺された弟が教会に懇ろに葬られ、第1版(1812)の「隠さ

れたまま済むことはありません」の箇所、第2版(1819)で「神様の前では」が加筆され、「神様はすべてお見通しです」と宗教的な意味が強化された故、キリスト教的教訓が民衆のモチーフに重ねられたと思われる。弟の清さを暗示する「雪のように白い骨」の表現は、日本語の頭蓋骨に通じるようで面白い。「白」の象形のひとつは頭蓋骨で、訓読み「しろ」が「しゃれこうべ」に由来するといわれており、さらに白は日本語もドイツ語も潔白や無垢を象徴するからである。

続いて日本の民話をいくつか読んでみよう。まず柳田国男『日本の昔話』より「時鳥の兄弟」を参照すると、昔、ある兄弟の弟が、山の薯を煮て美味しいところを兄に食べさせていた。だが兄は、弟がもっと旨い薯を食べていると思い、庖丁で弟を殺し、腹を裂いた。すると中からは筋ばかり多い薯が出てきたため、後悔して悲しむうちに、兄は時鳥になり、山の薯を掘る時節になると「おとと恋し／掘って煮て食わそ／弟こいし／薯ほって食わそ」と啼くのだそうだ。同様の話が柳田国男『新版 遠野物語』では姉が妹に庖丁で襲われ、たちまち郭公となり、「ガンコ、ガンコ」と啼いて飛び去る。ガンコは方言で「堅い所」

の意だそうだ。妹は悔恨に堪えず、時鳥になって「庖丁かけた」と啼いたという。いずれも懐疑によって殺めた方が悔恨する、悲しい昔話である。

次に小夜の中山に関わる二つの伝説から、楽器に関わる箇所を拾い出してみよう。「狭夜中山敵討」(1775)は天平期から話が始まる。業右衛門(以下業右)という追いはぎが、日坂で「いし」という名の妊婦を惨殺して金を奪った。死骸からは8ヶ月の胎児が生まれる。母の亡魂が、歌川(安藤)広重の浮世絵で知られる夜泣き石に200余日通い、その後、子は僧の与える飴の餅で育つ。他方業右の連れ子は継母に密かに殺される。埋められた場所から竹が出、業右はその竹で笛を作った。笛の音で殺害を知った業右は、妻を谷に突き落とすが、後に笛の話聞きつけた「いし」の夫傳内によって、自らも敵討ちをされる。



■歌川広重「東海道五十三次」(1833/34)日坂

曲亭主人(滝沢馬琴)の「小夜中山石言遺響」(1804執筆)は鎌倉幕府滅亡期から始まり、業右は元北条高時の一族郎党である。業右の悪行を悲嘆した妻が病死し、幼子八五郎は泣き暮らすうち、遂に両眼が潰れてしまった。全盲の身で継母の虐待に堪えながら尺八を吹いて自らの憂苦しを慰め、15才になった八五郎は、吹雪の夜、密かに家を出、追いはぎを業とする父の犠牲となる。奪い取った衣で過ちを知った業右は悔やみ、形見となった尺八で心を慰め、隠っていたが、妻に詰られ、再び追いはぎに出、小石姫(ここでは右少辨俊基の孫で、主人公月小夜の娘)という妊婦を殺害する。そこへ一人の法師が現れたため、業右は慌て、尺八を捨て置き、逃げてしまった。小石姫の傷口から生まれた8ヶ月の胎児は、この法師に救われる。小石姫の夫傳内は、遺体の傍に落ちていた血まみれの尺八を拾い、妻の亡骸を葬り、墓標に圓石を置いた。これが夜泣き石である。傳内は尺八を手がかりに仇討ちに出た。一方の業右は形見の尺八を尋ね歩き、やがて聞き覚えのある音に惹かれ、姫から奪った観音像と交換しようとした。この遺品が証拠となり、傳内は決闘を申し出る。業右の一刀をその尺八で受け止めた傳内は、元主君でもあった妻の仇を討ち果たした。

最後に、この小夜中山に関わる昔話「歌いがいこつ」を見てみよう。浜口一夫・水沢謙一編『日本の民話 29 佐渡・越後編』を参照すれば、小夜の中山で、怠け者の親父が働き者の親父を絞め殺し、谷間へ突き落とす。翌年、怠け者が再び小夜の中山にさしかかると、自分が殺した親父の髑髏が歌っていた。怠け者は、この髑髏を使い、江戸で金儲けをする。聞きつけた役人がやってきて調べようとする、髑髏はしばらく沈黙した後「・・・小夜の中山忘れたか」と歌い出し、強盗殺人も、髑髏の敵討ちも明らかになったという。

当時ヨーロッパのメルヒェンと日本の民話が、互いに直接素材になるとは考えにくいだけに、マーラーの『嘆きの歌』と日本の民話に、共通するいくつかのモチーフが認められることは興味深い。音楽ではたとえば、「ああ楽師さん・・・」、「ああ兄さん・・・」の箇所、音の高さを次第に上げながら3度現れる印象的なフレーズにおいて、小節毎に変化する拍子や旋法等に、異国の民衆的要素が感じられる。骨で作られた笛を介した弟の嘆きと訴えで、本来は少年が歌うだけに、とりわけ「石言遺響」の八五郎の悲話が思い出されてならない。

